平成８年度厚生省心身障害研究
「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

リプロダクティブ・ヘルス／ライツが女性個人の手に渡るまでのネットワークづくりとは
（分担研究：女性の健康に関する研究）

分担研究報告書

研究協力者　ウィメンズセンター大阪
阿古安子

要約
「女性の健康に関する効果的なネットワークとは」のリサーチ・クエスチョンから、女性のライフサイクルによって変化するニーズに適したネットワークについて調査した。特に個々の女性の視点の具体的内容に着目し、具体的な事例から、女性の健康に関して必要とされているネットワークと現存するネットワークの実際的効果について、具体的な事例を調べた。その結果、女性個人と医療をつなぐために医療以外の相談機関が女性のニーズを聞くことの有効性を確認した．女性の健康に関する効果的なネットワークとは、女性の一生に渡る個々の女性の視点からのニーズを探ることによって形成され，横につながりが広がっていくものであることが理解できた．

見出し語：女性個人の視点、女性個人のニーズ、女性のライフサイクル、女性の健康に関する効果的なネットワーク

研究目的と方法
女性個人のライフサイクルに適した健康に関する効果的なネットワークとして、どのようなものが必要であるかを、実際に個々の女性の声を聞いて、そのニーズを探り、その内容を、医学的側面と社会的側面から検討する。
実際に、いかなるネットワークが必要とされているかを知るために、1.女性の視点から問題点に目をむけ、2.個々の女性の視点から、ニーズ、価値、情報、経験、生活を探る。また、ネットワークの効果を知るために、3.現存するネットワークを形成・運営する際の、計画、実行及び評価のプロセスを知り、4.ネットワークが実行したことが、如何に人々に耳を傾けられ、理解されたのかについての評価と、5. ネットワークに関わったもの自身の具体的反応や変化などを聞き取った。
具体的には、以下の調査を行った。
（1）　ウィメンズセンター大阪のネットワークづくりから見えてくるもの
筆者がスタッフとして参加している「ウィメンズセンター大阪」でのネットワークづくりを事例として、ネットワークづくりに関する要望やその効果や課題の評価を行った。
（2）　北九州市の保健行政と女性の果たしたネットワークづくり
北九州市の国際シンポジウム「女性と健康」への取り組みとそこで形成されたネットワークの効果について参与観察と聞き取り調査によって検討した。

1.はじめに
女性が生まれてから死ぬまでのライフサイクルを考えるに際して、生殖器の問題を抜きにして語ることは出来ない。平成８年12月に総理府の男女共同参画推進本部が出した『男女共同参画2000年プラン』の中で、リプロダクテイブ・ヘルス/ ライツの中心課題として、いつ子どもを産むか産まないかを選ぶ自由や、安全で満足のいく性関係、安全な妊娠、

出産、子どもが健康に産まれ育つことなどが含まれている。
今回の研究テーマである「女性の健康に関する効果的なネットワークづくり」を考えるには、思春期や更年期における健康上の問題、不妊、安全な避妊、中絶、性感染症の予防、患者の人権を尊重した治療のあり方など、生涯を通じての性と生殖に関する課題に、より大きな視野に立つネットワークのあり方を見据えていく必要がある。女性のライフサイクルを通じての健康についての総合的な支援を考えることは、現在の少子化問題を考える上での女性の視点からの提言にもなるだろう。
本報告は「リプロダクティブ・ヘルス／ライツが女性の手に渡るまでのネットワークづくりの必要性に関する研究」をテーマにした調査報告である。女性の持つ健康問題を、女性の個人のライフサイクルに適したニーズは何か、さらにそれをめぐる価値、情報、経験などは何か、それに必要なネットワークとは何かを考える際には、今日の保健、医療、福祉との連携も含めて考えていくことが必要である。今回は、女性のライフステージと女性保健〔平成３年度心身障害研究 REPRODUCTIVE HEALTH に関する研究：女性の保健に関する研究〕に報告されていた図なども参考にして、従来のような縦のつながりで結ばれていた状況ではなく、女性が生活する中から生じる具体的な声を拾い、重あわせ、かつつないだネットワークとはどのようなものであるかを検討する。

２．女性の健康に関する効果的なネットワークとはどのようなものか

ネットワークはいろいろなレベルで考えられ、各レベルによってネットワークの諸効果が異なった様相を示すかも知れない。そのために、女性が生まれてから死ぬまでのライフサイクルの中に必要なネットワークは多様な角度からのつながりを必要とするものではないかと思われる。
以下に考えうるネットワークを挙げる。

A.女性個人と女性個人のネットワーク
B.女性と病院のネットワーク
C.病院から女性へのネットワーク
D.病院から病院へのネットワーク
E.女性と公的機関の（女性センター、婦人相談所、保健所、市役所）のネットワーク
F.女性と民間機関（ウィメンズセンター、ＰＰＣ、ＦＬＣ、性暴力を許さない女たち会、家族計画協会など）のネットワーク
G.公的機関と民間機関のネットワーク
H.病院と公的機関のネットワーク
I.病院と民間機関のネットワーク
J.病院と公的機関と民間機関のネットワーク
K.諸外国の政府、女性の健康グループ、病院、女性個人とのネットワーク

どのようなネットワークが効果的であるかは、女性のその時々のライフステージ、経済状況、知識、年齢、欲しいと思う情報の内容により変化し多様性を示す。さらに「女性の声」を聞くかぎりでは、個人が抱える問題が最初から整理され、不安が簡単に解消されるとは、なかなか思えないという現状がある。個々人が、ネットワークの利用の仕方やネットワークの効用について理解して、自分の抱える問題点をハッキリ整理している場合により成果があがるといえよう。しかし、女性は、日々の生活において、自分の健康の問題については目の前に「トラブル」がせまり、決断を迫られてもなかなか行動を起こしにくいということが現実の事例からうかがえる。であるからこそ、なおさら、あらゆる状況を想定したネットワークづくりが必要になってくるのである。
以下に、女性の健康に関する効果的なネットワークとはどのようなものかについて考えるための図を示す。

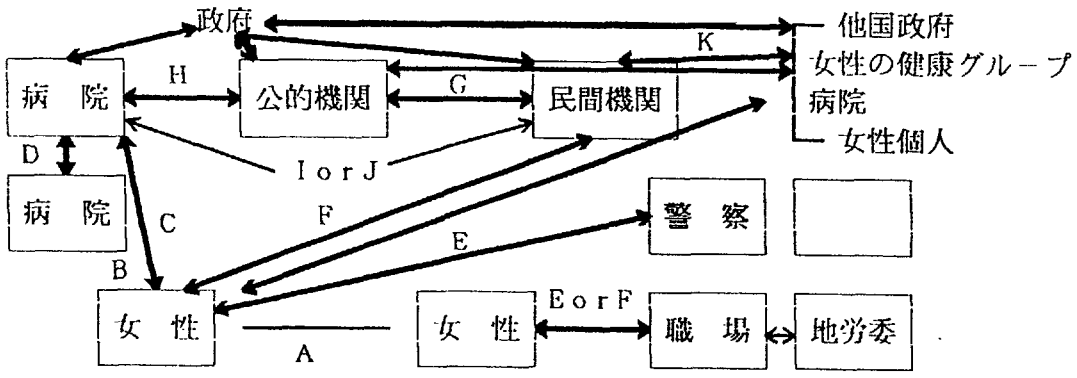


図１　女性の健康に関する効果的なネットワークとはどのようなものか

3.ネットワークの効果

ネットワークの効果について、何を指標として評価するかについては、以下のようなことが有効に行われているかの検討が必要ではないかと考える。

A.女性の健康問題について欲しいと思う情報の伝達
B.女性の健康問題についての問題整理
C.女性の健康問題についての問題の解決
D.女性の健康問題について日常生活をスムーズに送れることを可能にする支援
E.女性の健康問題と女性の人生についての相互的関係を視野に入れた問題の解決

女性の健康に関連した問題の解決は、女性を身体的、社会的、感情的に良好な状態にするように持っていかなければならない。子どもの利益のみを考えるのではなく、女性自身にとっての健康そのものをも向上させることが重要である。そして女性の意志決定の能力を拡大し、自分の自らのからだを管理できるようにすることである。そのためにも多くの問題解決を可能にする状況づくりが必要となる。そして、多くの女性の声が反映され、問題解決にまでこぎつけられるように具体的な方法を含んだよりきめこまやかなネットワークづくりが要求されている。

4．調査結果：ネットワークの活動内容とその概要

今回は女性が「健康」に関してどんなネットワークが欲しいのか？女性の必要とする情報とは何か、要求・問題整理、解決などについての手助けをどのようにしてほしいのかなどをさぐるとともに、下記のようなネットワークづくりをやっている機関、つくろうとしている人たちをたずね事例研究を行った。その結果について報告する。

（１）ウィメンズセンター大阪のネットワークづくりから見えてくるもの

本研究班（原班）の研究対象は25～45歳のライフステージの中での「健康」に関する効果的なネットワークである。この事を知るために、「ライフステージと女性保健〔平成３年度心身障害研究REPRODUCTIVE HEALTHに関する研究: 女性の保健に関する研究〕」において報告されていた図を参考として女性に起こるからだの変化のトラブルを重ねてみた。

以下に示した図２からわかるように、25－45歳のライフステージにある女性と生殖器とのつきあいは人生の中でより深いものであり、産婦人科医療と直面せざるをえないという事実である。この時期にこそ健康に関するネットワークが、女性と医療を結び、さらに医療の枠を越えて女性のエンパワーメントにつながることが必要である。ウィメンズセン

ター大阪の「女のからだ１１０番」の電話相談の結果を評価すると、電話をかけてくる女性の７割～８割がその年代の女性であり、相談内容も「月経」に関しての相談が1989年～95年の間では常に最頻値を示した。成熟期には、女性にとって身近に相談できる場所がいかに必要かが、参考資料を見てもよくわかる（文末を参照されたい）。

〔ライフステージと女性保健・産婦人科医療〕

25才……30才……40才……45才 ……

性成熟期　　更年期

― 母子保健――――― 子宮ガン検査 ――――――――― 骨密度測定

（保健所）　乳ガン検査

（産婦人科）

ＳＥＸ　〔女性特有の疾患〕

避妊・妊娠・中絶・出産　子宮筋腫・子宮内膜症・子宮脱・膣炎

性行為感染症・膣炎　卵巣嚢腫・卵巣ガン・子宮ガン

図２　女性のライフステージと女性保健・産婦人科医療

次にウィメンズセンター大阪の電話相談や来訪による面談相談の実例を紹介しながら、女性にとってのネットワークの課題を見ていきたい。

a.ウィメンズセンター大阪の相談活動の経過と目的

・電話相談活動

ウィメンズセンター大阪では1989年から「女のからだ110 番」という電話相談を開設している。そこでは以下のような紹介を行っている。すなわち、

〔電話相談の目的〕
Ⅰ．女性のからだに関して困った時に相談する機関がない
Ⅱ．女性のからだに関して困った時に話す場がない
Ⅲ．声として聞こえてくるけど実態はどれぐらいのケースがあるのか？
Ⅳ．どんな内容なのか？

〔電話相談の反応〕
Ⅰ．女性がずっとためこんでいて、いくつもの質問をするが要領が得ない。
Ⅱ．とにかく誰かに聞いてもらいたくて電話を切らない人
Ⅲ．こんなつまらないことを聞いてもいいのかと聞く人
Ⅳ．やっと医療機関にいく決心がついた

〔電話相談内容の分析〕 ― 参考資料参照
Ⅰ．医療機関に行くまでもないようなケース
Ⅱ．医療機関に行った方がいいかどうか迷っているケース
Ⅲ．医療機関に行ったけれど、充分な納得が得られていないケース
Ⅳ．女はこうあるべき、という既成の価値感からはずれているという悩みのケース

〔女性の欲しい情報とは〕
Ⅰ．専門的な医療知識よりじゅっくり「私」の問題を聞いて欲しい。
Ⅱ．「私」の問題を一緒に考えて整理して欲しい。
Ⅲ．「私」の問題を解決したい。

・面談相談活動の取り組み

電話相談の相談内容から見えてきた問題を整理する中で、「医療機関に行ったけれど、もう一度自分自身の問題を整理していきたい、セカンドオピニオンを求めたい、治療に向き合うまでの道程を一緒に考えたい」という思う人にセンターを開く必要性があることがわかった。そこで、スタッフがカウンセラーとしての役割を果たし、問題整理を手伝って、医療と結ぶために面接相談活動を行った。その結果、次のように女性の要求課題を整理するためのネットワークを広げることになった。

〔女性はどうするのか？〕
Ⅰ．女性からの電話で時間予約をします。
Ⅱ．カウンセリングの中で女性が何を知りたいか、何を改善したいか、何を問題と思っているのかをじっくりと整理していきます。
Ⅲ．そのなかでセカンドオピニオンとしての意見を聞きたい、治療に向き合うまでの道程を医師に助言が欲しいということになれば紹介する

〔セカンドオピニオンの相談が必要なケース〕
Ⅰ．女性たちが医師の前に立ったときに医師が話をする医療情報についてわかる手助けをする。
Ⅱ．医師と女性たちが話したいことが話せるんだということを認識する。
Ⅲ．自分の問題として病気を知り、治療に取り組んでいけるように納得して病気と関わっていく状態の手助け。
Ⅳ．病気との関係を考えていくことによって自分の人生を見つ直すきっかけにする。

b.ウィメンズセンター大阪のセカンドオピニオン支援システム

今回、ウィメンズセンター大阪のスタッフおよび阪南中央病院医師へのインタビューによって、支援システムの必要性を聞いた結果、次のようなことがわかった。

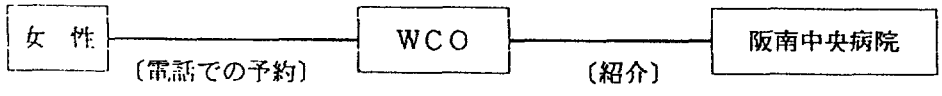


図３　ウィメンズセンター大阪(WCO)が医療と女性をつなぐ

〔ウィメンズセンター大阪から阪南中央病院産婦人科へのネットワークを通じて〕
Ⅰ．今までの医療は治療の枠を越えていない。
Ⅱ．医療従事者は女性の人生を考慮に入れて治療に取り組んでいない。
Ⅲ．医療従事者も体験者の一人なのに体験をいかしきれていない。
Ⅳ．女性も自分のからだのことを知らなさすぎる。
Ⅴ．女性の一生と産婦人科医療の必要性をもっと明確にして「女性科」とする

〔今後の課題は？〕
Ⅰ．医療従事者が女性の生の声を聴く。
Ⅱ．女性が治療の中でも医療従事者に何を聞きたいのか整理して話せるようにする。
Ⅲ．医療と女性を結ぶネットワークづくり。
Ⅳ．医療の枠を出て医療従事者が女性の状況を知るためのネットワークづくり。

c.医療と女性をつなぐネットワークの必要性とは？

ウィメンズセンター大阪の医療と女性をつなぐネットワークを図にすると以下のようになる。

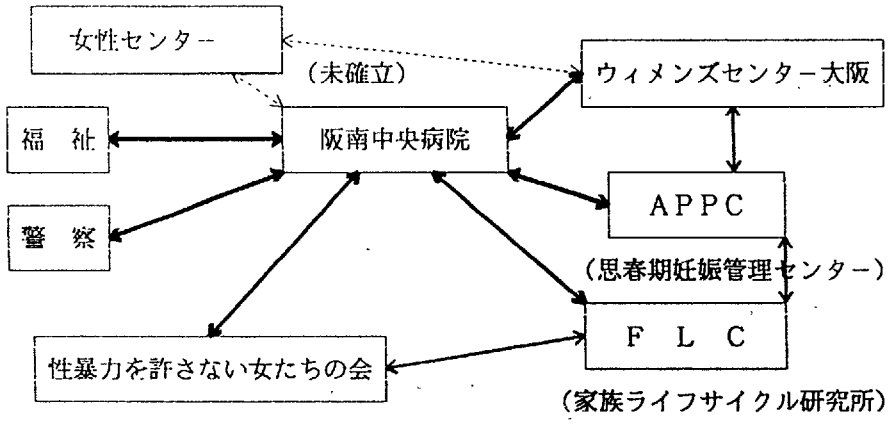


図４　医療と女性をつなぐネットワークの例

ウィメンズセンター大阪のスタッフおよび阪南中央病院医師は、１人の女性の人生における問題解決のために、それぞれ、「相談」という枠組みと「治療」という枠組みの中で、お互いの力を出し合っている。そして、産婦人科医療が持つ大きな意味を見つけだしてお互いの限界を感じながらも手を結ぶことの重要性を確認しあっている。個人と医療を結ぶネットワークが、ウィメンズセンター大阪のような医療機関ではない組織が関わることによって広がり、結果として、女性が自ら欲する情報にたどりつき、医療従事者も女性に的確な欲しい情報を提供することができるようになったと考える。これによって、現在の「患者」と「治療者」・「医療者」のすれ違いをも防ぐことができるのではないだろうか。

（２）北九州市の保健行政と女性の果たしたネットワークづくり

次の事例として、1996年9月6日に北九州市立女性センター”ムーブ”で開催された国際シンポジウム「女性と健康：リプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点から」の計画・実行によって形成された女性の健康に関する行政と民間のネットワークについて述べる。

このシンポジウムは、国際協力事業団の研修プログラムの一環として行われたジョイセフ（家族計画国際協力財団）による研修で、アジア、アフリカ、中南米各国から北九州市に滞在していた母子保健および家族計画の専門家と北九州市民の情報交換・交流を目的として開かれた。

このシンポジウムの主催は「”女性と健康”国際シンポジウム実行委員会」と「㈶アジア女性交流・研究フォーラム」である。北九州市と北九州市の外郭団体であるアジア女性交流・研究フォーラム、ジョイセフそして個々の女性たちとのネットワークづくりの中心的役割を果たしたのは北九州市立女性センターであった。その結果、行政のいくつかの部局とNGOsと女性たちの協力関係が結ばれた。

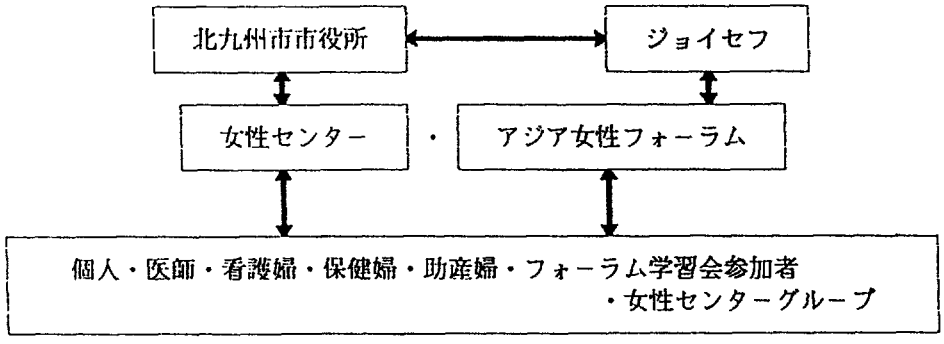
ここでは、準備段階を含めてのこの国際シンポジウムへの取り組みを、今後の保健行政が「女性の健康」に関するネットワークをつくる意味を考えるためのモデルケースとして検討したい。このネットワーク作りの経過をたどることによって、今までの男性社会の枠とは異なる新たな「女性の健康」を語ることができ、今後、他の行政機関がリプロダクティブヘルス／ライツに関するネットワークづくりに具体的に取り組む際の参考となると考える。

北九州市（市役所・市立女性センター）とアジア女性交流・研究フォーラムの呼びかけ

によって、北九州市の個々の女性たちは、自ら驚きをともなってネットワークづくりに加わった。このネットワークづくりと活動の内容、その効果について聞き取ったことをまとめると以下のようになる。

〔内　　容〕
Ⅰ．北九州市市役所の福祉・保健・医療を取り扱う中で女性の健康問題を取り組みのはじめての試み。
Ⅱ．今までのはじめての出会いの人をネットワークでつなげる
Ⅲ．女性たちにリプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点の伝達
Ⅳ．今後の他県行政への参考

北九州市保健行政と女性のネットワーク



〔活動内容を要約〕
家族計画国際協力財団の研修でアジア、アフリカ、中南米各国から母子保健及び家族計画の指導者の方たちを東京で受け入れることが決まり、北九州市役所も同様、研修事業を受け入れてほしいとい要請が家族計画国際協力財団からあった。
北九州市役所は保健福祉局となっていて福祉・保健・医療を結ぶ大きな窓口があり実質的には保健福祉局が研修に力をかして、最後のシンポジュウムに関しては（財）アジア女性交流・研究フォーラムが主催した「開発の視点でのＮＧＯのＣＡＰＡＣＩＴＹ　ＢＵＩＬＤＩＮＧ（組織強化）のワークショップ受講生のメンバーが中心ととなり、女性センターのグループ看護婦、助産婦など幅広く声をかけあいました。

〔国際シンポジュウムをやることで何がお互い共感できたのか？〕
Ⅰ．行政との連携で国際シンポジュウムでリプロダクティブ・ヘルス／ライツを取り組みができた。
Ⅱ．自分自身のために良かった。
Ⅲ．自分の仕事を見直せた。
Ⅳ．リプロダクティブ・ヘルス／ライツを他に広められた。
Ⅴ．他の女性たちの動きがよくみえた。
Ⅵ．仕事を越えた形でのネットワークづくりの必要性
Ⅶ．女性がいかに自分の性について語れないか？

〔今後の課題と実践例について〕
Ⅰ．個人が「生涯を通じた女性の健康」にどんな基本的考えをもっているか？
Ⅱ．女性個人に対する「健康」へのサービスのあり方について
Ⅲ．望まない妊娠をしないためにはどんな情報が必要か？
Ⅳ．医師と女性との関係は？

〔ネットワークの広がり〕
Ⅰ．市役所の中でのネットワーク
　　女性政策課 ― 保健福祉局 ― 女性センター・アジア女性フォーラム
Ⅱ．市役所と民間女性のネットワーク
　　保健福祉局 ― 女性センター・アジア女性フォーラム ― 民間女性
Ⅲ．民間女性と民間女性のネットワーク

〔ネットワークをつくる上で気づかせた課題は？〕
Ⅰ．「私」の人生とは　Ⅱ．「私」の避妊とは　Ⅲ．「私」の子宮筋腫とは
Ⅳ．「私」の妊娠とは　Ⅴ．「私」の出産とは　Ⅵ．「私」への性暴力や虐待とは

〔今後どんなネットワークづくりが欲しいか〕
Ⅰ．仕事を越えた形でのネットワーク
Ⅱ．仕事同士の中でのネットワーク
Ⅲ．ＮＧＯ同士でのネットワーク
Ⅳ．新たなＮＧＯ〔からだに関する〕つくるためのネットワーク
Ⅴ．自分たちのからだや人生を語り合えるネットワーク

聞き取り調査の中で、北九州市とアジア女性交流・研究フォーラムが呼びかけて形成されたネットワークに参加した個人の女性が語ったことは、「ひょとしたら自分が必要と思ったことは多くの女性を代弁しているのじゃないか？」ということであった。

ネットワークの効果として、これらの女性が「それって女性が欲しがっている情報なんだろうか」「それって今後の課題なんだ」とネットワークづくりの中で感じ始めたことは、重要なことではないだろうか。今回のこのネットワークは、女性が行動を起こすことによって、女性にとって必要だと思うネットワークづくりが見えてくるという良い結果があらわれた。今後、このようなネットワークづくりが他の市や県にも広がり、継続されていくことによって、リプロダクテイブ・ヘルス／ライツが行政や保健・医療の中でも広がっていくことを進めることになると思う。

5.おわりに

以上、25－44歳を範囲とした女性の健康に関する効果的なネットワークとはどのようなものかということを調べてきた。その結果、女性にとって必要なネットワークとは縦のつながりではなく横につながり、女性の一生に渡って広がっていくものだと思われる。

ある女性は次のように語っていた。

「内科にいくより産婦人科に行く方が多かった。性成熟期を過ぎて更年期が来て月経が終えて閉経になって老年期に至ってもまだ、婦人科とはおさらばできないのです」。

このことを考えていくと女性の生まれてから死ぬまで、いつの時期にでも相談ができるネットワークの必要性を感じる。

今後はどのような形のネットワークが女性にとって有効であるのかを探りながら、女性

の声をもっとひろっていくことが需要と供給を結びつける結果になっていくのではないかと考えたい。

今回の研究を通じ、個人の女性が欲しいと思うネットワークの情報は多くの女性の共感をよぶことになったり、今まで話せなかったことを語ることができるように心をときほぐしていく。そしてそれが女性の生きる力になり、周りの人をも救うことにつながっていくことがわかった。

ウィメンズセンターのスタッフの多くは「自分の情報が欲しいと思ってかかわっているうちに自ずと与える側になった」と話していた。個人が欲しい情報を求めてネットワークを形成することから次に組織の運営に移っていく過程における諸課題も見えてきた。

この研究を遂行する過程そのものが、ネットワーク形成へと連動していると感じられる。

文献

1. ウィメンズセンター大阪、「女のからだ110番 No.1 」
2. ウィメンズセンター大阪、「女のからだ110番 No.2 」
3. ウィメンズセンター大阪、「報告集，女のからだ・女の月経：子宮内膜症とは」

Abstract

What is an effective women's health network?
Ako Yasuko

Inspired by the question "What is an effective women's health network?," I conducted a survey of networks designed to deal with women's changing needs throughout the life cycle. Paying particular attention to concrete examples, I investigated both the effects of existing networks in Osaka, and the as-yet-unexisting networks which are imperative to respond to women's health demands as seen from the individual perspectives of women surveyed in Kita-Kyushu. As a result, I confirmed the efficacy in answering women's heath needs of women's health consultations outside of medical treatment. Effective women's health networks are those which increase horizontal connections between institutions such as hospitals and health centers, NGOs and individual women.

ウィメンズセンター大阪電話相談参考資料

相談システム ―― 毎月第1～3週の〔木〕午後1～8時
スタッフ及び電話相談養成講座終了生がボランティアでシフトを組んで行われている。

① 居 住 地

1989年1月～12月迄

	大阪府	京都	奈良	兵庫	滋賀	三重	和歌山	北海道
89年	270	16	19	68	11	0	9	4
	関東	中部	東北	中国	四国	無記入		合計
	5	2	0	15	10	102	0	531

1990年1月～1992年12月迄

	大阪府	京都	奈良	兵庫	滋賀	三重	和歌山	北海道
90～92年	362	26	27	99	11	2	14	2
	関東	中部	東北	中国	四国	九州	無記入	合計
	45	8	3	13	14	2	97	725

1993年1月～1995年12月迄

	大阪府	京都	奈良	兵庫	滋賀	三重	和歌山	北海道
93～95年	449	57	49	316	18	5	18	12
	関東	中部	東北	中国	四国	九州	無記入	合計
	182	83	13	30	37	29	226	1528

93年～95年の合計に含む〔その他イタリア・ドイツ4〕

② 相談者の年齢

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無記入	合計
89年	12人	125人	108人	120人	56人	11人	4人	95人	531人
90～92	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無記入	合計
	18人	188人	176人	198人	66人	19人	2人	58人	725人
93～95	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無記入	合計
	23人	466人	441人	312人	117人	22人	4人	142人	1528人

93年～95年7才1名含む

③既に相談した相手

相談した相手	89年	90年～92年	93年～95年
① 親	15	46	124
② 友人	35	103	244
③ 配偶者	39	94	237
④ 恋人	2	9	42
⑤ 子ども	1	4	4
⑥ 教師	0	2	2
⑦ WCO			12
⑧ 医療機関	195	273	609
⑨ 公的福祉機関	6	10	21
⑩ その他	0	37	33
⑪ なし			206
⑫ 無記入	161	284	277
	454	862	1811

④相談内容について

内　　容	89年	90年～92年	93年～95年
①避妊	13	27	31
②妊娠	42	42	88
③中絶	12	6	28
④月経	99	142	262
⑤婦人病	65	59	55
⑥おりもの	16	27	42
⑦不正出血	25	31	47
⑧乳房の異常	12	17	21
⑨性器	16	21	27
⑩不妊	24	52	175
⑪出産	20	14	12
⑫更年期	46	53	105
⑬子宮筋腫	24	34	104
⑭セックス	17	35	73
⑮身体コンプレックス	18	18	11
⑯その他	53	70	146
⑰その他外	20	10	
⑱膣炎		38	51
⑲STD		11	
⑳子宮内膜症		23	250
	522	730	1528

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

「女性の健康に関する効果的なネットワークとは」のリサーチ・クエスチョンから、女性のライフサイクルによって変化するニーズに適したネットワークについて調査した。特に個々の女性の視点の具体的内容に着目し、具体的な事例から、女性の健康に関して必要とされているネットワークと現存するネットワークの実際的効果について、具体的な事例を調べた。その結果、女性個人と医療をつなぐために医療以外の相談機関が女性のニーズを聞くことの有効性を確認した.女性の健康に関する効果的なネットワークとは、女性の一生に渡る個々の女性の視点からのニーズを探ることによって形成され,横につながりが広がっていくものであることが理解できた.